

東日本大震災：福島第1原発事故 「すぐ捜せていれば」 あす浪江の遺族会設立、東電に謝罪要求
毎日新聞 2012.03.10 東京夕刊 8頁 社会面 写図有 (全1,010字)

東京電力福島第1原発事故により、津波で行方不明になった家族を約1カ月間捜索できなかった福島県浪江町の遺族たちが震災1年の11日、避難先の二本松市で遺族会の設立総会を開く。遺族の間には今も「原発事故さえなければ家族は助かったのではないか」「遺体を長く放置され、許せない」との思いが強く、東電への慰謝料や謝罪を求めていく方針だ。【三上剛輝、高瀬浩平】

「奥さんです」。昨年8月、二本松市の高林寺で、熊川勝さん(74)＝浪江町請戸(うけど)＝は住職に骨つぼを渡された。妻洋子さん(当時73歳)とは信じられなかった。くぎや砂が混ざり、両膝の手術で入れたはずの人工骨がない。火葬の際に捨てられたと町の職員から聞いた。「すぐに捜せていれば、こんな粗末な扱いを受けずに済んだ。ごめんな」

熊川さんは自宅で津波に襲われ、洋子さんを抱きしめたまま流された。やっとの思いで、天井の隙間(すきま)に浮き上がったが、妻は水の中に沈んでいく。「洋子、しっかりしてろ」。一晩中名前を呼んだ。

翌朝始まった一斉捜索は原発事故による避難指示で中断された。「原発内で作業している人もいるのに」。避難先で眠っていると洋子さんの声が聞こえ、何度も目が覚めた。

捜索が再開されたのは4月14日。遺体安置所を歩いて回った。体の特徴が書かれた紙や遺留品を見詰め、記憶をたどった。

7月、警察から遺体を引き渡したいと連絡を受けた。捜索再開日に自宅近くの川沿いで見つかったと聞かされた。DNA型鑑定の結果を待った。

「災害から2～3日は生存可能性がある。原発事故さえなければ」との思いは消えない。故郷の墓は立ち入り制限が続き、一周忌を前に納骨もできない。2月、新しい骨つぼに入れ替えた。一周忌を前にできる唯一の供養だったという。

浪江町の死者は181人、行方不明者3人(2月末現在)。遺族会には約100世帯250人が入会する。参加予定の川口登さん(62)も「自宅周辺は放射線量があまり高くない。早く捜せば助かったかもしれないのに、行方不明の両親は40日間も放置された。戻ってきた時は自分の親かどうか分からず、声にならなかった」と話す。

11日は浪江町の追悼式に先立ち、二本松市の葬祭場で総会を開き、活動方針を決める。妻を亡くし会長に就任する予定の叶谷(かのうや)守久さん(72)は「東電は値上げを検討する前に、私たちの気持ちと向き合い、まずは謝罪すべきだ」と話す。